特定領域研究「日本の技術革新－経験蓄積と知識基盤化－」
第３回国際シンポジウム研究発表会　論文集
2007 年 12 月 14 日・15 日

大洋州におけるオーラルヒストリーについて
Oral History in Australia and New Zealand

永田　宇征*・鈴木　浩**・金田輝男***
NAGATA Takayuki[1]・SUZUKI Hiroshi[2]・KANEDA Teruo

オーラルヒストリー、歴史の再構成、アボリジニ、マオリ族、
ニューサウスウェールズ州立図書館、ニュージーランド文化遺産保存省
Oral History, Aborigine, Reconstruction of History, Maori, State Library of New South Wales, Ministry for Culture & Heritage

要旨

オーストラリアとニュージーランドにおけるオーラルヒストリーの実態調査を行った。両国ともオーラルヒストリーを歴史の研究手法としてきちんと位置づけしている。研究対象領域が多岐に亙り、アウトプットの量もかなりの数に上る。両国の特徴として、オーラルヒストリーのアウトプットは録音テープの形で保管していることである。これを州立図書館や国立図書館に保管し、一般の要求に応じて聞かせている。また、オーラルヒストリーに対する考え方が確立している。マニュアルの整備がなされており、大学のカリキュラムに取り入れる、といったように環境の整備にも注力している。

１. はじめに

「オーラル･ヒストリー」という語の使用は、1948 年のコロンビア大学の歴史家アラン・ネヴィンズを以って嚆矢とする。筆者らは科研費の領域研究「日本の技術革新」の中で、オーラルヒストリーにより戦後の日本の技術革新の事例を収集し、その実像を剔抉することを目的としているが、核心を突くインタビューのあり方や、成果の活用法等、オーラルヒストリー全般に亙る方法論に関する研究も併せて視野に入れている。

2005 年度に米国西海岸でのオーラルヒストリーの実施状況について調査したのに続いて、2006 年度はオーストラリア、ニュージーランドの実態を調査した。同地域はアボリジニやマオリ等の先住民史についてオーラルヒストリーを採り入れている旨聞き、その方法論等を学ぶべく調査を企画し、永田と鈴木が現地調査に赴いた。本論文ではその概要について述べることとする。

２. オーストラリア

オーストラリアでは、シドニーにあるニューサウスウェールズ州立図書館のオーラルヒストリー担当のキュレーターであるローズマリー･ブロック女史を訪ねてインタビューした。同氏はオーストラリア・オーラルヒストリー協会のニューサウスウェールズ支部の支部長でもある。

世界オーラルヒストリー協会が正式に発足したのは 1996 年にスウェーデンで開催された第９回オーラルヒストリー国際会議のときであるが、オーストラリア・オーラルヒストリー協会はそれより 20 年近く前の 1978 年に設立された。各州に支部を置いており全豪大会のみでなく、各支部でも大会を開いている。同協会が目的として掲げているのは以下の４点である。

- オーラルヒストリーの技術と方法論を磨く
- オーラルヒストリーの方法論の活用について教育する
- オーラルヒストリーについてあらゆる角度からの議論を活発化する
- オーラルヒストリーの記録の保存を促進する

オーラルヒストリーとは何であるかについては、次のように謳っている

- オーラルヒストリーは個人の、他に二つとない人生経験の記憶の記録である。過去の何かについて知ろうとするとき、そのことについて知っている人に聞くこと以外に術がないということはよくあることである。
- オーラルヒストリーは記録を作り出し、また

*国立科学博物館　産業歴史センター　主任調査員
**GE エナジー　技監
***東京電機大学　工学部　電気電子工学科　教授
* National Museum of Nature and Science Center of The History of Japanese Industrial Technology　Senior Researcher
**GE Energy Technology Executive
***Tokyo Denki University Professor

既存の記録を補完する。オーラルヒストリーによって過去が甦る。人は文書によるよりもオーラルヒストリーによるほうが数段興味を持てる。

・オーラルヒストリーは現在と将来のために過去を保存する。オーラルヒストリーを記録するということは双方向のプロセスであり、このプロセスを通じて、インタビューされる人は、細心の注意を以ってインタビューの筋書きを練り上げた人と一緒に記憶を呼び起こしていく。

・　オーラルヒストリーはインタビューされた個人の肉声、アクセント、語彙を保存することができる。

図１　ニューサウスウェールズ州立図書館

オーストラリア・オーラルヒストリー協会は 30 年の歴史を持つだけに、体制が整っている。上述した支部組織やそれらの活動の場の確立をはじめ、各種ツールも整備されている。「インタビューに際しての６つの要諦」、「インタビュースキル」、「同意書」、「実施ガイド」といったものの他に、100 ページを超えるハンドブックも作成している。

オーラルヒストリーをどのように活用するかということについて以下のようなことを挙げている。アボリジニやトレス諸島民のような、従来書き物になることの少なかった人々についての歴史、ローカルコミュニティーの歴史、家族史といったものの記述、子供たちに、同時代に生きた大人を生きた歴史書として見ることを教え、ジェネレーションを超えた理解を増進する、などである。

ブロック女史らが扱っているオーラルヒストリーがどのような層を対象としたものであるかは上述のことからも伺えるが、具体的なイメージを得るために国際オーラルヒストリー学会で発表された論文について触れてみる。筆者らがブロック女史をシドニーに訪ねたのは 2007 年２月であったが、その７ヶ月前の 2006 年７月に同地で第 14 回国際オーラルヒストリー学会が開かれている。この学会での発表論文の内容は以下のようなものであった。

・ロシア革命と亡命
・ナイジェリアのサニ・アバチャの突然死が民衆にどのように迎えられたか
・環境変化（熱帯雨林）の分析にオーラルヒストリーを導入した（衛星写真や人工統計の分析から環境変化を調べる従来の方法がスナップショットを与えるのに過ぎないのに対してオーラルヒストリーは変化の連続的イメージを与える）
・知的障害者へのオーラルヒストリーの有効性
・1960 年代の性的革命
・イスラエル占領下のパレスチナの 500 人の女性に対するオーラルヒストリー
・素人堕胎で死亡した自らの祖母に関して、母をはじめとする親戚一同にインタビュー
・インドパンジャブ地方の虐殺事件について

扱っているテーマは千差万別であるが、オーラルヒストリーの目的のひとつである歴史の再現ということではいずれも共通している。しかし、筆者らが目指す技術者を対象とした技術開発に関するオーラルヒストリーは含まれていない。国際オーラルヒストリー学会に集う研究者の多くが、人文系であることが窺える。

しかし、技術者を対象としたオーラルヒストリーが行われていないわけではない。筆者らがブロック女史を訪ねた当にその日に、シドニーのオーラルヒストリアンの集まりがあり、メンバーに紹介された。その中のマイケル・クラーク氏は 40 年間ニューサウスウェールズ州の公共事業を扱う部署で働き、リタイア後の人生を産業遺産の調査・保存にささげている。この仕事の関連でオーラルヒストリーの実施にも力を注いでおり、「全豪技術者対象オーラルヒストリー計画」のリーダーを務めている。クラーク氏がオーラルヒストリーの対象とするのは、その事業の名称からも伺えるように、工学者・技術者特に輸送技術者である。但し、現在筆者らが属ずオーラルヒストリー研究推進委員会が対象とするような、

功なり名遂げた指導的な技術者ではない。

彼らのレコーディング記録はすべてブロック女史が所属する州立図書館に保管されており、一般の人も必要に応じて利用できるようになっている。

ブロック女史もクラーク氏もそうであるように、オーストラリアではオーラルヒストリーの記録を音声テープで残している。これは後ほど触れるニュージーランドについても同様である。文書にしてしまえば残らない沈黙とか間、それに話してのアクセントも音声テープであれば残せる、というところに大きな意味を見出している。ブロック女史によれば、特別なアクセントで話す人を演じる俳優の役にも立つということである。それだけに、テープに関する情報はきちんと記録している。インタビュイー、インタビュアーの氏名はもちろんのこと、インタビュー日時、テープの保管場所などの他にインタビュイーの時代を追った簡単な経歴を 150 字程度で記している。さらに別シートに詳細な記録があり、テープの開始後何分何秒から何分何秒まで、どのような主題について話されたか、そのキーワードは何であるかを細かく分けて記している。

３.ニュージーランド

ニュージーランドでは、文化遺産保存省(Ministry for Culture & Heritage)のシニアオーラルヒストリアンであるミーガン・ハッチング女史を訪ねた。同女史は国際オーラルヒストリー学会の大洋州地区のキーパーソンである。以下、同女史や同僚の話、関連資料を基に略述する。

同国にはニュージーランドオーラルヒストリー協会(The National Oral History Association of New Zealand－NOHANZ)があり、種々のコミュニティ、職業、あるいは学界を対象としたオーラルヒストリーを実施している。NOHANZ は、２年に１回の全国大会、地域でのセミナーのほかにワークショップを必要に応じて開催している。また、定期的にニューズレターを発行するほか、年に１回会誌の「ニュージーランドのオーラルヒストリー」を発行している。また、これとは別に、たとえば「マオリとオーラルヒストリー」と題するような特別誌を臨時に発行している。

ナショナルライブラリーの中にあるアレクサンダー・タンバル・ライブラリーにオーラルヒストリーセンターがある。オーラルヒストリーセンターと NOHANZ は密接に協力しながら活動している。このセンターによれば、オーラルヒストリーの定義は以下のようになる。

- 先住民等、特定のコミュニティの口碑
- ライフヒストリーインタビュー
- 特定のトピックする焦点を当てたインタビューでライフヒストリーも一部含まれる
- さらに焦点を絞り込んだ研究で使われる短いインタビュー

因みに、筆者らが属するオーラルヒストリー研究推進委員会では、オーラルヒストリーを以下の３つの型に分けている。

- 傑出した研究者／技術者の半生についてのインタビュー
- 特定の事項に焦点を当てた複数の人に対するインタビュー
- 創造性の探求を意図した極めて独創的な仕事をした人に対する連続インタビュー

このように比較してみると、ニュージーランドのオーラルヒストリーと筆者らのそれとは、その目指すところは似通っているといえる。ただ、筆者らの場合は対象を技術者に特化しているという点が特殊である。

オーラルヒストリーセンターには 10,000 のレコーディングがある。これらのレコーディングには通常、アブストラクトを付し、インタビュー経過時間によるコード化を行って、即座に目的のインタビュー箇所にアクセスできるようになっている。これはオーストラリアの場合と同様である。時には、インタビュー記録のすべて、あるいは一部が文書化されることがある。写真をはじめとする他の関連資料も同時に保管している。これらのレコーディングテープは予約制で聞くこともできる。

ハッチング女史は大学でオーラルヒストリーについての講義を行っており、その講義資料を入手した。主要な点について以下に記す。

①定義

まず「オーラルヒストリーの定義」から入っている。学生に答えさせた上で、講師の見解を述べることにしている。ここでも「音声記録」が定義の中核となっている。さらに、ライフヒストリーとトピックスベースの２種類のタイプに分けられることについても言及している。

②計画

オーラルヒストリーから何を得ようとするのか、そのアウトプットは何かーアーカイブか本か、あ

るいは他の形かーを問うことになっている。

③庶務

コピーライトの委譲、使用上の制限、成果物をどこに保管するか等の事項について説明する。

④調査

オーラルヒストリーは、既存の資料を補完し、どこにもない情報を得る手段として最適のものである。インタビューは時間とエネルギーを費やすのに値するものでなければならない。質問のフレームワークを熟慮し、質問のリストを作成する。以上のようなことについて解説する。

⑤インタビュイー

まずインタビュイーはどのような人であるべきかの定義づけを行わせる。適切な人を探す方法として、紹介者を介したり、予備会合を行った上でその中から選んだりすることが有効であることを説く。喜んでインタビューに応じてくれる人でなければならないこと、手紙でプロジェクトの概要を送り、インタビューの日時と場所を確認することが必要であることを教える。

⑥規範

インタビュイーに対して、インタビューを受けることを承諾するかどうかの判断に必要な情報を与えるべきであることを説いている。プロジェクトの目的、テープをどこに保管するか、どの程度まで答えるかの自由が確保されているか、といったことを知らしめるほか、インタビューテクニックの向上も必要であることを伝える。他人の人生に踏み込んでいくのであるから、これらのことは当然のこととして配慮されるべきであることを説いている。

⑦機器

どこで何をするのかを考慮し、録音の仕方について配慮する。マイクの位置、音量レベル、テープノイズの除去、バックグランドノイズの軽減といったことについて説明する。

⑧実習

以上の準備の後、実習に進む。

大学でオーラルヒストリーのカリキュラムを有していることは、同国がオーラルヒストリーを歴史研究の手法として明確な位置を与えていることの証左であろう。わが国においてもしかるべき取り組みが必要である。

４.まとめ

両国での調査の結果、いくつかのことが明らかになった。

ひとつは、オーラルヒストリーが歴史研究の手法として市民権を得ているということである。筆者らを受け入れてくれた二人の研究者は、それぞれ州立図書館、文化遺産保存省という公的な機関で働き、その肩書きにもオーラルヒストリアンと記している。オーラルヒストリーの研究者として立っていける環境が整っていることを物語っている。それだけに両国のオーラルヒストリー協会の活動は活発であり、年次大会や各種セミナーが行われ、研究者の数も多いと思われる。オーストラリアでは 100 ページに及ぶマニュアルを、長年の研究成果としてまとめており、研究の充実ぶりが窺える。

二つ目は、記録を音声で残していることである。沈黙や間、アクセントも重要な情報であるとの認識である。後の活用を考えて、聞きたい部分に直ぐにアクセスできるようにテープの開始から経過時間を追ってインデックスを付している。

三つ目は、このように盛んなオーラルヒストリーではあるが、研究者や技術者を対象としたものはそれほど活発ではないということである。テクニック的なところで随所に参考になる点はあるが、日本の技術を残し、技術開発のすばらしさを伝え、さらに独創的な研究の背景を探ろうとする筆者らの目的とは、方向が異なる。この点に関してはやはりわれわれ自らが積み上げていくほかはない。

【文　献】

１）電気学会研究会資料「米国西海岸におけるオーラルヒストリー調査報告」、2006 年、HEE06-11

2) ステフィック、ステフィック「ブレイクスルー」オーム社、2006